

阪正臣研究（承前）

——『椋屋全集』拾遺補正——

はじめに

明治・大正・昭和三代にわたる歌人椋屋阪正臣は、敬簡阪正緒の子として名古屋市花屋町に安政二年（一八五五）に生れ、昭和六年（一九三二）八月二十六日卒去。寿七十七、正四位。国学を平田鏡胤に学ぶがやがて師命により権田直助に就く。和歌は坂広雄に手ほどきを受け、後に桑名の富樫広厚に学んだ。このあたりについては、彼自身が『三拙集』に

此の三拙のうち歌ハうふすなの神主坂広雄先生に手ほときせられ伊勢桑名にては富樫広厚先生に学ひ東京に出て、は権田直助本居豊頼高崎正風三先生の添削を乞ひ近き頃より井上通泰先生の正を受く。書の方ハ幼時広雄先生に後西尾為忠横井北泉の両先生に聊法を問ひき。画ハ沼田荷舟先生に数葉の手本を受けしかとも習ひ得ずして止みにしそ悔しき。

（『三拙集』七十丁ウ。私に句点を付す）

と記している。

砥鹿神社（參州）、鎌倉宮伊勢皇太神宮奉仕等を経てやがて華族女学校教授となり、御歌所寄人被仰付。昭和三年（一九二八）には大嘗祭主基方歌作者を被仰付。また、大正十一年（一九二二）十二月に宮内省蔵版、文部省発行となる『明治天皇御集』（三冊）は正臣が版下を浄書したものである。



図版①

た全五巻五冊の『椋屋全集』（非売品）が存する。

一 『椋屋全集』と問題点の所在

『椋屋全集』は、総頁二三九四頁の活版であり、編者自跋に

此の全集に収めたる短歌は壹万六百四十余首（文章中にある分は除く）の多きに上り、長歌は百三十五首（文章中の分は同じく除く）今様、新体詩、唱歌、軍歌、琵琶歌の類は百十七首にして、文章は百三十七篇でありますが、父は興に触れ又人の依頼に應じて、直ちに筆を執りて懐を述べ、稿を留めずして送りもし又与へもするごと、て、稿本の無きもの甚だ多きため、此の全集に漏れたるもの沢山ありますので、名は全集と申しながら、決して此れにて尽きたる訳ではありませんぬ。

（漢字は現在通行字体に改めた）

八木 意知男

とある。これは要するに『椀屋全集』（以下、単に『全集』と称す）が阪正臣の全作品を網羅しているのではなく、遺漏があり、『全集』は一応の目処に過ぎないというのである。事実、明らかに彼の作品であり乍ら、これを『全集』に照合すると未収の事がある。極端に謂えば『三拙集』も『全集』には入っていない。

しかし、これは已むを得ない事である。正臣は数多くの歌を詠み、文を書き、そして人人に与えている。その一々を跡追うことは本人でも不可能に近い。如何に生前の本人が整理していたとしても、である。まして歿後にそれを為すことは至難の事となる。残された道は、それと氣付いた者が丹念に拾遺補正する事である。

そこで、此度稿としたのは、たま／＼手許に架蔵する歌集類から正臣の歌文を拾い出し、提示する作業に他ならない。条幅・短尺の類は、此度は対象としない。また歌集の簡単な説明を付したのは向後の便の為であるし、幾本かについて図版を挿したのは現時点で手許に架蔵する証の為である。

二 拾い出し作業

拾い出しにつき、その紹介は、便宜上、A和歌部・B序文部・C墨跡（浄書）部に分別する。また、以下の要領による。

- (1) 対象とした歌集等に便宜上通し番号を付した。順番は年代の古い順である。
- (2) 明治期の本の特色とも言う可く、例え活版であつても変体仮名が多用されているが、これを現在通行字体に改めた。
- (3) 漢字は原則として現在通行字体に改めた。
- (4) 片仮名「ハ」「ミ」等はそのまゝに残した。また、送り仮名は本の

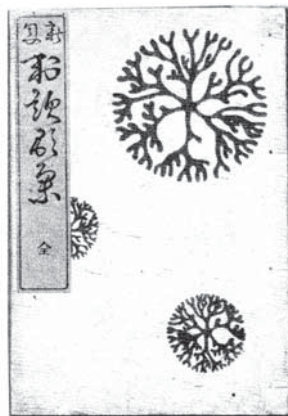
マ、である。

- (5) 多くの本が非売品である故、その点に関する付記はしない。
- (6) 詠者名表記は原則として本のマ、である。故に姓に「大江」「阪」「坂」の三様表記が混在する。

(7) 各歌の左注に『椀屋全集』・『三拙集』の入集状況を付記したが、「全二五〇」としたのは『椀屋全集』二五〇頁、「拙二五才」としたのは『三拙集』二十五丁オモテ、「全ナシ」としたのは『椀屋全集』に見当たらないことを意味する。さらに左注には語句の異同も示した。

A和歌部

1 『勅題歌集 全』



いつの頃から『勅題和歌集』がつくられるようになったかは不明。本書は明治十五年（一八八二）一月の御歌会始の勅題和歌を一冊にまとめて同年十二月に刊行したもの。大塚真彦・橋本信行編輯、橋道守校閲、金花堂佐太郎発行。多田親愛・大谷光尊・

鶴久子・間宮八十子・佐佐木弘綱・村上忠順等の名も見える。和装活版。正臣はこの年二十八歳、三月に上京し忠愛社入社。故に詠者名の「横須賀」は愛知県。

河水久澄

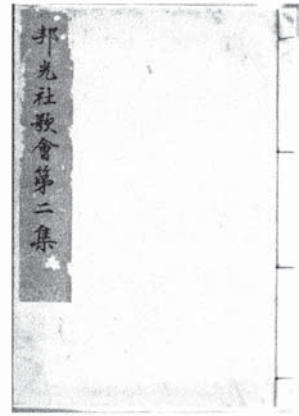
横須賀 坂 正臣

天雲の影さやかなる五十鈴川神代より杜かくは澄らめ

「全二三三五」。『全集』では無年月。これにより確定する。

2 『邦光社歌会 第二集』（明治二十二年九月）

- 3 『邦光社歌会 第三集』(明治二十三年九月)
- 4 『邦光社歌会 第四集』(明治二十四年八月)



明治二十一年(一八八八)九月邦光社京都の第一回大歌会が催された。その第二回・第三回・第四回の歌集。「邦光社」は従来の歌道結社がともすれば風紀紊乱に墮するを嘆くと共に、歌道振興を目的として大同団結した全国歌道結社。京都・大阪・愛

知等に組織された。伏見稲荷大社宮司近藤芳介が中心に呼びかけたもので、宮中女官や御歌所の面々も参加した。ここでは表記三集を対象とするが、何れも著作者兼発行者は遠藤千胤、印刷者は北村四郎兵衛。石版摺和装本。

兼題と当座通題との二部構成。第二集兼題は「春曙」、第三集兼題は「花下言志」、第四集兼題は「春山月」。会には晃親王・朝彦親王・文秀女王が参加。正臣は御歌所に入る。

春 曙

阪 正臣

うちひさす都の空のいつもあれと山のはかすむ春の曙

「全三二〇」。『全集』は初句「なづかしき」につくる。

花下言志

阪 正臣

梅花さけるかきりの春の日をあそひくらさんこのもせにして

「全三五七」。『全集』は初句「さくらばな」につくる。

春山月

阪 正臣

花ならぬ梢もしろし山のはをいまかいつらん春のよの月

「全三九三」。

- 5 『新年 勅題 詠進歌集四編 全』



本書は明治二十三年(一八九〇)一月十八日の宮中御歌会始の勅題「寄国祝」を以て事前に一般に公募し、同年六月に出版したもの。編集者は橘道守、発行所は椎本吟社、和装活版。なお、この応募作品中の高得点歌は椎本吟社『明治歌集卷八』に収めた。

寄国祝

東京赤坂溜池榎坂町 坂 正臣

万代も一代のことしおほきみのひつきみたれぬあしはらのくに

「全三五二」。

- 6 雑誌『歌学』第一〜第四号



明治二十五年(一八九二)三月、久米幹文・小中村義象・落合直文を監督、金子富太郎・佐野柳次を幹事として「歌学会」が発足し、毎月に『歌学』誌が東京堂から発行された。阪正臣は少くとも第一号から第四号まで「歌会式(承前)」なる稿を連載す。

- 第一号「歌範」部

竹裏鶯

坂 正臣

花かけは人くとなきてうくひすのうつろひにけり竹のはやしに

「全三九二」。ただし『全集』は明治廿四年分とす。なお、この歌は海上胤平『歌学会歌範評論』(明治廿六年四月、一本

社)にも出。

第二号「歌範」部

阿仏尼

阪 正臣

今もなほ世にか、やきぬいさよひの月にわけつる道しはのつゆ

「全三九七」。「拙六〇オ」。ただし『三拙集』は第二句を「世にそか、やく」につくる。『全集』は明治廿四年分とす。

第三号「雑録」部、浪花津会（四月廿五日）報告

故正一位藤公を忍ひて春露

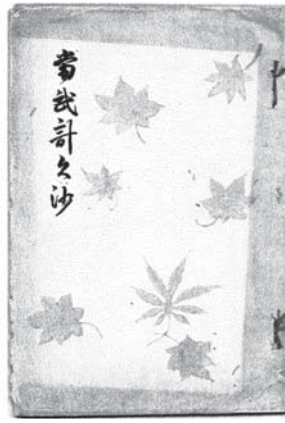
といふことを

正臣

春ことになみたの露のかくれはや御墓のこけの色まさるらむ

「全四一七」。ただし『全集』は第三句「か、ればや」、第四句「御墓の夢の」につくる。

7 『たむけくわ』



明治二十五年（一八九二）十月二日、慈眼大師天海の二五〇回遠忌が修され、日光山輪王寺（門跡権大僧正彦坂謙厚）の廟前にて講頌式が催された。ところがその式後にも手向草が五〇〇〇余首よせられるに及んでこれを一冊としたのが本書である。熾仁親王・晃親王の題字を備う。編輯兼発行者太田純融（輪王寺執事）、発行所輪王寺々務所。和装活版。

夜 雨

正臣

たきつせのおとこそまさされ二荒山ふるとしもなきよはの雨にも

「全ナシ」・「拙ナシ」。妻「坂和かな」名詠歌も有り。

8 『八桑枝集』



二二六

明治二十六年（一八九三）四月十七日、三重県桑名郡桑名町に鎮座する県社桑名神社の正遷宮が斎行された。次いで同月十九日廿日の両日祝祭が催され、それに合わせて兼題「社頭祝」にて和歌の奉納が求められた。これを刷り巻としたのが『八桑枝集』一

冊である。御巫清直・福羽美静・井上頼圀等の名が見える。和装活版。編輯兼発行者不破造酒三郎、印刷者後藤安兵衛、発行者桑名社々務所、明治二十六年十一月出版。正臣は今様を寄す。きみと民との中臣の。神のまもりもいや堅き。磐根にたつる真柱の。ゆるきはあらし八洲国。

「全ナシ」・「拙ナシ」。

9 『ありその玉藻』

明治二十六年（一八九三）、愛知鳴海在の季流加藤正道（加藤鑿一の父）が六秩を迎えたのを祝う詩歌集。「寄海」題と「還曆」題の二部構成。加藤鑿一の著作兼発行、印刷は真盛社（山田真武）、明治二十六年十一月発行、和装活版。正臣は「大江正臣」名にて序文も記す（全二三三三）。また、室わかかな（若菜、二宮殿櫃二女）の詠もあり。

華族女学校教授 坂 正臣 東京市

寄海 おいのなみよるとも見えすなるみ泻きしの松風ちよは呼へとも
還曆 おくしもをしのきて咲きし翁草またわかくさにかへるはるかな

「全ナシ」・「拙ナシ」。

10 『内外詠史歌集』二冊

明治二十八年（一八九五）、税所敦子によって編輯され、明治三十八年（一九〇五）に税所徳子によって再版された詠史和歌集。正臣以外に高崎正風や鎌田正夫等御歌所の人々の名が認められる。発行者は延昌松井総兵衛、印刷は秀英舎第一工場、和装活版。

王 仁

ありなれのかわ底深くひそみつるわにもいてきて仕へける哉

「全四一三」。『全集』は明治廿五年三月「御会兼題」

在原業平

正臣

うきなのみ世になかし、やあくた川かへりて深き心なるらん

「全二六九」。『全集』は明治廿一年三月「御歌会兼題」。

巨勢金岡

正臣

こせ山のつはきの花の八千代までにほひのこれる筆のあと哉

「全三二六」。『全集』は明治廿二年三月「御歌会兼題」。

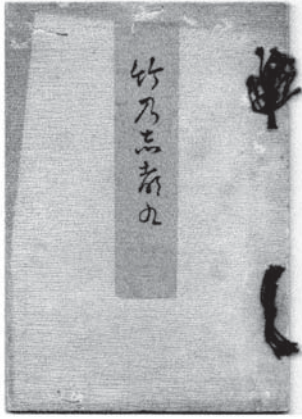
紫式部

正臣

むらさきの一本ゆゑに日の本のはそのは色まさりけり

「全三六四」、「拙六〇オ」。『全集』は明治廿三年七月「御兼題」。

11 『竹のしづく』



明治三十一年（一八九八）四月、山階宮晃親王霊前への献詠歌集。兼題「春月幽」。巻首歌小松宮彰仁親王・文秀女王・賀陽宮邦憲法王妃好子。明治三十一年六月発行、編輯兼発行者常善広田金兵衛、和装活版。

御歌所寄人坂

正臣

阪正臣研究（承前）

朧夜の月の空にもさやけきは仰きなれにしみかけ也けり

「全四二八」。

12 『やまとにしき』



明治三十二年（一八九九）一月に編輯者石樽辻五郎（千亦）、選者佐々木信綱、発行所ころの華発行所、にて発行された活版洋装本。「四季のうた」部と「くさぐさの歌」部の二部構成。高崎正風・小出繁・伊東祐命・大口鯛二・金子元臣・税所敦子・正岡子規・川田順・與謝野鐵幹・本居豊穎・中島歌子・小杉楳邨・福羽美静・岩倉具視等々の名が見える。

暁落花

坂 正臣

袖の上にちりくる花ハほの見えてあかつきくらし森のした道

「全ナシ」「拙十六オ」。ただし、『三拙集』には無題・無年紀なり。故に、これにてこの歌の詠作年代が確定する。

13 『雪のしらゆふ』

明治三十二年（一八九九）二月八日、京東山某楼に於て向陽会主催近藤芳介五十日祭献詠歌会（遺族代表近藤久敬）あるに、兼題「春雪」。

巻首歌は文秀女王・好子殿下（邦憲王妃）。編集兼発行者山本彦兵衛、印刷者石田有年、石版摺和装。

従七位

坂 正臣

雪ふかきおくつきところたつねきてはらへハミゆるはるのわかかさ

二二七

「全四四七」。

14 『秋の寄處』^(よすが)

裁判官から公証人を歴任した蓼屋杉野興宗が先考杉野英知（肥前神埼郡人）の五十年祭を齋行するに就き、詩歌を人々に願いて一巻として霊前に手向けたもの。兼題「秋懐旧」・「笛」。編集兼発行者杉野興宗、印刷所活版製造周抜合資会社（戸塚成音）、和装活版。発行は明治三十七年（一九〇四）十月。

秋懐旧

從六位 坂 正臣

秋くれはよそへて君ををしむ哉移ろふ菊におつる紅葉に

「全ナシ」・「拙ナシ」。

15 『椿華集』



明治三十九年（一九〇六）四月、紀国那賀郡人靖軒中尾純（字は公純、別号桃源幽人）の古稀の寿筵が設けられた折に寄せられた詩歌類を一冊に纏めた集。編輯発行人は中尾準一郎、印刷は大阪国文社。和装活版。明治四十三年五月刊。

賀桃源幽人古稀齡

御歌所寄人從五位 阪 正臣 東京

も、の花うつる小川のみなもとに三千世の春を契りてやすむ

「全ナシ」・「拙ナシ」。

16 『松のみどり』



明治四十四年（一九一〇）十月、大阪住の朗齋辻直方が古稀を迎えた祝賀の為に編まれた歌集。

辻直方は鳥取池田候に仕える家に生る。京にありし折、コレラ病流行時東福寺が臨時避病院となったが、病終息後消毒を提言するも及ばず、使

用豊一千余枚を焼棄したり由良川の開鑿をなした。

当該歌集は辻武美の編集兼発行、大阪黒田印刷所印刷、和装活版。発行は大正二年四月。

從五位 阪 正臣

敷島の道の辻うらまさしくも君は千とせをへむとのりてき

「全八八二」。「全集」は明治四十四年十二月。

夏鳥

阪 正臣

夏もなほかれ枝みえてあを鷺の声かしましき川そひのもり

「全ナシ」・「拙ナシ」。

寒草

同人

栄ゆへき春まつのけに霜さけてかれぬ草葉も寒きいろかな

「全ナシ」・「拙ナシ」。

17 『亀戸神社猷詠集』

東京亀戸神社が月次二十五日に、天満宮の故を以て猷詠歌を公募したもの。題者及び点者は御歌所参候遠山英一。ここに採り上げたものは大正四年（一九一五）分。同社々務所発行。

一月 新年氷

從五位 坂 正臣

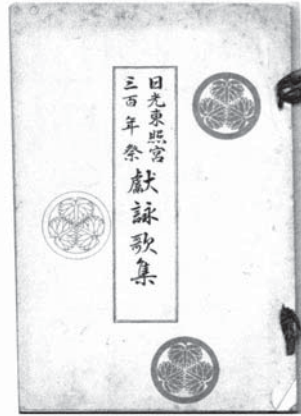


19 『乃木神社献詠歌集』

ふたらやまみたらしさむしみねのゆきとけていはねをつたひきぬらむ
「全ナシ」・「拙ナシ」。

大正五年（一九一六）年十一月、創祀されて間もない京伏見桃山の乃木神社に献詠披露式が斎行された。この献詠は兼題「紅葉」であり、競点歌点者には坂正臣・大口鯛二・尾上八郎等十名があたった。この折の献詠

阪正臣研究（承前）



18 『日光東照宮 献詠歌集』

ことしよりこゝろはもたむわかみつの水のあつく堅きことくに
「全ナシ」・「拙ナシ」。
三月 月前梅
阪 正臣
つきかけにかのみさやけくにはふかなくれなる色の梅の花その
「全ナシ」・「拙ナシ」。

日光東照宮の三百年祭に際して、兼題「社頭水」にて公募された歌の集。正臣は、鎌田正夫・大口鯛二・加藤義清・遠山英一等御歌所関係者と共に選者もつとめた。大正五年（一九一六）三月発行の本書は、大日本歌道奨励会栃木支部（宇都宮市）の宮本和一が発行兼編纂（宇都宮市）の印刷は三共社印刷所（宇都宮市）、和装活版。
御歌所寄人従五位勳五等 坂 正臣

20 『玉藻集』

歌を一冊にまとめたのが本書で、大正六年五月発行。編輯兼発行者は西沢信太郎、発行は乃木神社献詠会、和装活版。
正五位勳五等 坂 正臣
うゑわたすいかきの紅葉秋毎に神のみいつと共にてるらむ
「全一〇八二」。

大正六年（一九一七）、古稀を迎えた玉置源太郎（旧広島藩士、東京国文社々長）を祝す祝賀帳。和歌・俳句・漢詩・祝詞を書画と共に編纂印刷したもの。大正六年九月発行。
編纂兼発行者大瀧由次郎（『椋屋全集』の印刷者）、印刷所東京国文社、活版。与謝野晶子・末松謙澄等の名見えたり。
寄玉祝
御歌所寄人従五位 坂 正臣

みすまるのちいほよろつのをへてもたえぬはきみか玉のをにして
「全一〇七五」。『全集』は題を「寄国祝」とするが誤植ならん。

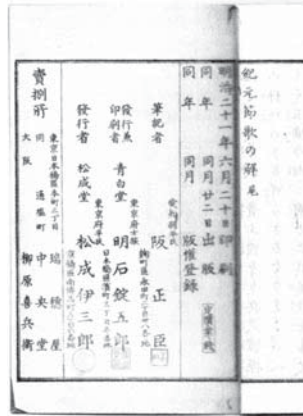
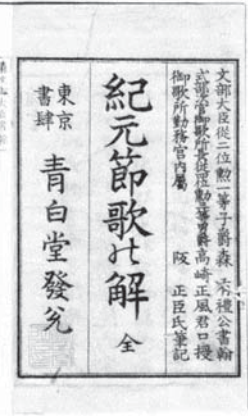
B 序文部

21 『紀元節歌の解 全』



『椋屋全集』巻五、二二〇三頁に「紀元節歌に就て 代高崎正風翁」なる一文を備う。この文は、先ず文部大臣森有礼に献ぜられ、森大臣の「本編ノ如キハ方今ノ一大好書ト存スニ付速ニ御刊行行希望ス」なる言を承けて、明治二十一年（一八八八）六月に阪正臣筆記として出版発行された『紀元節歌の解 全』一冊に該当する。すなわち、高崎

二二九



正風の口授を阪正臣が筆記して成ったものである。

この本の書誌概要は、次の如し。

タテ225 糸×ヨコ146 糸、

楮紙袋綴、全十七丁。文部大臣

森有礼書翰、従四位勲三等男爵

高崎正風の序(正臣筆)を備う。

版心は

紀元節歌の解 三清書屋藏版

とある。匡郭内に一面九行、一

行あたり十六字の活版。漢字仮

名交り文、総ルビ。含図版二葉。

さて、彼此の本文を引き較べて見ると、句読点の違いや漢字と仮名の

違い等は別しても、次の如きが認められる。ただし、送り仮名等は無視した。

全集頁	全集行	全集本文	紀元節歌の解本文
一一〇三	5	むかしにして	むかしにて
一一〇四	6	皇子諸功臣	皇后皇子諸功臣
一一〇六	10	鳥取の山中に	鳥見の山中に
一一〇七	11	宝祚隆えまさん	宝祚の隆えまさん
一一〇八	12	御鏡を見ることは	御鏡を視ることは
	4	一事ある時には	一朝事ある時には
	5	氏におへる	氏と名におへる
	7	狂暴禁むるとて	狂暴を禁むとて

一一〇

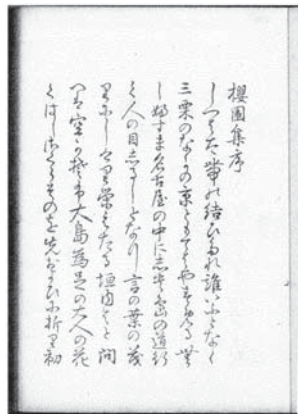
二二〇九 8 を教へ導きしかば と教へ導きしかば
1 いかでかはむかしを いかでか亦たむかしを
5 よろづの国ぞ よろづの国に

8 天壤と無窮 天壤と無窮(八木注「無窮」は全て「無究」につくる)

二二一〇 12 聞えたる国なり。又い 聞えたる国なり。工芸美術も、勉めざる可らざるなり。またいへらく、

へらく、

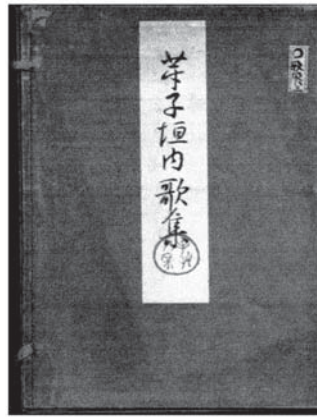
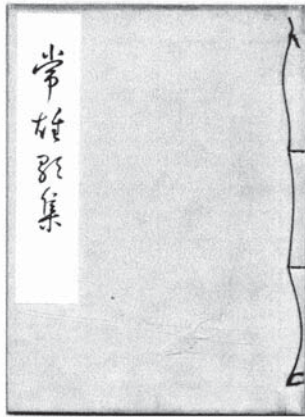
22 『桜園集』二冊



尾張人、桜園大島為足の遺歌集。大正五年(一九一六)十一月刊。著者は故大島為足、発行者は桜園社(代表長谷部愛造、和装石版摺。大正五年「御哥所寄人 坂正臣」名にての序を備う。「全ナシ」、ただし『全集』二〇四二頁に記事あり。

桜園集序

しつはた帯の結びたれ誰いふとなく三粟のなかの京ともてはやすめるむしふすま名古屋の中にしき島の道行て人の目しるしとなり言の葉の茂りにしけり栄たる垣内はと問へは空かそふ大島為足の大人の花くはしきくらそのを先およひに折り初むることなりしを昨年秋の野分に風にこの桜木の吹き倒されて名たゝる園のたちまちに荒れ果てたるハあたらしともあたらししかハあれとも此陰におほしたてられし水とりのをしへ子たちの柚人か手にとるといふよきかあまた有りて散りほへりし言の葉をかき集めえりと、のへてかくめてたき

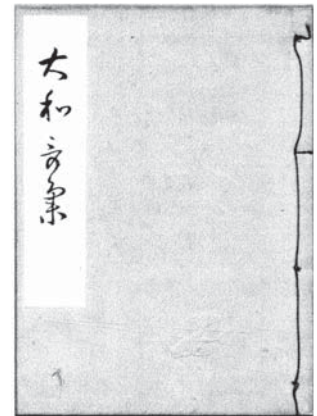


23 『芽子垣内歌集』二冊

物とせられつるは嬉しともうれしこれか中には明治の御代の歌御会始に大御前に講せられしも有りまたはやく茂岳冬道の翁たちのめてくつかへられしもあるへくさらぬもいにしへになつます今にかたよらす一ふし人に貢なりてえならぬにほひを得られし歌ともなれハ桜木こそかれ朽ちぬれ其の花はとこしへに世に伝はりゆかむものそ大人か友の中にことにこゝろあひなれしかハとてはしかりものすへくかのよきをしへ子たちより勤めらるれば稲舟のいなとはいかていふへき大正のいつとせ秋季皇霊祭の、ち七日 御哥所寄人 坂正臣 するす

『芽子垣内歌集』とて纏められている二冊の歌集は、『常雄歌集』と『大和哥集』を謂う。常雄は芽垣内奥田主馬常雄、別に松園あるいは君川と号す。名古屋の人。天保六年（一八三五）生れ、文久二年（一八六二）歿す。植松茂岳等に国学を学び、和歌を能くす。大和は天保七年（一八三六）名古屋に生れ、奥田常雄に嫁し、大正九年（一九二〇）三月に歿す。和歌を能くし、明治四十一年（一九〇八）の御歌会始に予選となる。また絵画にも巧みであった。大正十年（一九二一）六月、芽子垣内社（大和が主導した和歌結社）発行の

阪正臣研究（承前）



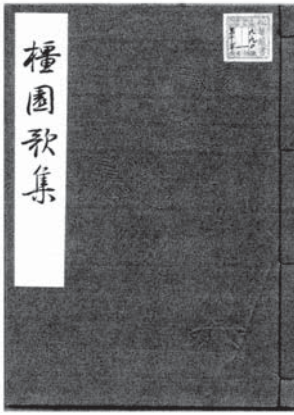
本書は、編輯兼発行人は恒川平一。和装石版摺。「御哥所寄人從五位勲四等坂正臣」名で「大和歌集序」を寄せているが、『常雄歌集』も『大和哥集』も版下浄書は正臣と見うけられる。はたしてしからば『明治天皇御集』浄書と同時期となる。

大和歌集序
わか尾張の国に誇るへき事近き頃となりてハさのミ多からす城の上の金の魚宮重のさとのつちおほ根などは所出てむもさとひたるへし然るにこゝに誇らむとするひと事有りそハ秋の野の花のつかさ芽子垣内の刀自千町田の奥田の大和姫か一生の行状になむ姫は名古屋藩士として千四百石を領せし富永氏のまなむすめと生れ十八歳の時同藩なる千二百石の家奥田常雄ぬしにとつかれきぬしは極めて学に篤く年わかくしてあまたの著述有りその浄書ハ多く姫か筆に成りきとそ常雄ぬし身まかられし時は姫か年僅に廿七花ならはさきいて、また二日とも経ざるほとなりけり其の中陰の墓詣に髪うるはしく結びあけきぬ花やかに着粧ひ恰も親迎を受けし新婦の如くにいてた、れしかはあたりの人々驚き怪ミ且笑ひ且爪はしきさへしたりけるに姫ハ菩提寺にて心静かに翠の髪の長やかなるを切り棄て被きこしうち掛のきらひやかなるを脱きて之を仏前に手向け荒々しき木綿衣にきかへて家に帰られしかハさきにあやしミ笑ひし人々悔い慚ちけりとなむそれより後は姿も心も男子となりすまして還暦のよそひになるまてはいさ、かもあかき色を衣にそへられさりき仰姫ハ大家に生れ大家に嫁かれしこと、てみつから奉すること甚厚く何時何人いくたり訪ひゆきても食事に至れハ山海の味もてあへしらはる、ならひ

二二二

なりきとかかくて、癡八年わかく精力のさかりなるまゝに、歌をば茂岳千畝のおきなたちに画をは華堂ぬしに学ひ或ハ雅楽の笙を吹き或ハ機織のわさにいそしミ人の思ひ及ハさる織りかたなどもせられけり彼の奈良朝の画工かものせし、積尊涅槃の図を文晁の摹によりてゑかゝれたるなど筆といひきほひといひ専門の人も舌を巻くならむ晩年にはことに力を後進の士女の教養に致し婦人国風社を設けまた目さまし会といふ青年歌軍の中にもましりて一方の勇将たりし也明治四十一年歌御会始の勅題詠進に御前披講の光榮を荷ひ記念として二葉会といふを起し家にて月々開かれしか亡き後までも衰へすかくのときは世にたくひ多かる人ならむや誠に尾張の国のほこりなりしを惜きかな大正十年三月八日八十五歳にてミまからる浜の真砂と数多かるをしへ子たち、癡を仰き慕ふあまりに七十年來癡か心血をしほられし言の葉の百か一つなりともすりまきにして頒ちもたらまほしといひ合せて選ひ整へられしなむ此の冊なりけるこの冊の哥のよしあしハこゝろ有る人の一目見ハ明かなるへきまゝ、贅言せずこれに良人常雄主の遺稿をも合せ世に公にせむとして癡かをしへ子たちよりはしかきのあとらへを受けしハ正臣にとりての名譽そと誇りに筆とする時は大正十年五月のはしめ 御哥所寄人從五位勲四等坂 正臣

24 『檀園歌集』



大正十一年（一九二二）に歿した名古屋熱田の人、檀園長岡秋道の和歌集。正臣は同郷人として旧くより相知れる縁にて「序」を寄せている。編輯兼発行人長岡安吉、印刷所今泉石版印刷所。和装石版摺。大正十三年（一九二四）

十月発行。

「全ナシ」

序

今は昔庚戌の年の宮中御会始新年雪といふ御題をいとまあるとしの始にうれしくもふらハといひし雪そふりけると詠進し預選の一となりて明治天皇昭憲皇后の大御前に講頌の光榮を辱くせし歌のぬし長岡翁ハ尾張国愛知郡熱田新宮坂なる粟田氏に生れ父は徳太夫といひき翁幼名は音熊ひとゝなりて、姪女と称ふ秋道ハ実名檀園は号なり伯父長岡豊足氏に養はれてその家をつく家世々熱田神宮のミヤ人にて養父はことに重職に在りて大宮司家と親しく翁は今の千秋男の父季福君の学友たりき夙くより植松茂岳野村秋足の両学匠に就きてまなひ哥よむことにもたけられき養父は神職中の慷慨家ともいふへき人にて熱田神宮の伊勢の大御神に垂きてかしく尊き御やしるにますことを朝廷のあきらかに知しめされぬさまなるをうれたみ親き林美香といふ人たちと共にこれをきこえあけ廟議を動かし社格を昇せむことをはかり屢京都にゆきかひいたつきて久しくすたれたりし勅使の参向を見るにいたりき翁年わかかりしほとより是等の人につき隋ひかきつくされしこと多し維新の後はこの権称宜に任せられしに宮司少宮司の軋轢により終に千秋家の凶変をひき起し翁も憤慨のあまり潔く職を辞し歌を詠し大神のミまへにさゝけおきて薪炭商となりミつから車を挽きて売りありく途にして敵党の首にあへはことさらにそのくるまをすりつけてたしなまめられきとぞ松かけに車かたよせ休らひて餅くひをれば物おもひもなしなどよまれしもこのころの事なりけらし詠まるゝ歌のおもむきもこの頃よりいたくかはり天真爛漫のものとなりき明治廿三年よりは熱田町助役の職に居り十年のあひたいそしみて後之を辞し閑居吟詠をたのしみとし

三十六年より八日課哥といふことを始め日々数首を平直によりて病中すらこれをやめず身まからるゝ数日前までつゝけられけり翁ハ半世の不遇をたゝこの道よりて慰籍せられしものといふへし資性剛直なりしかともまた能く人と和する所あり且至誠をもて事を処し千秋家をおもふこと切にして常に反対派のすきを窺ひ之を覆して男爵をしてかはらしめむと図られしかとも志つひに成らず大正十一年八月十一日名古屋古渡の家にミまからる時に年八十なりき同郷の貝谷杜蔭小貝泉郷の両氏遺囑を重ミしこの集をえらひついでられたりこの集の外に哥のことまた熱田の旧事などをする机上漫録といふもの並に祝詞集などの著ありとそおのれもはやくより知る人にて歌のまとゐにうちとけかたらひしことあれハ論者たちのすゝめによりて小伝をしるし序のかはりとす

大正十三年五月七日

坂 正臣

25 『したもえ』



御歌所寄人であつた鎌田正夫(大正四年十二月歿)の詠歌九三六首を抜き出し編集した家集。編者は北里蘭、発行者は北川四良左衛門、代表発行所はさわらび会。和装活版。大正十三年(一九二四)九月発行。正臣は「下もえ序」を記す。

「全ナシ」。

下もえ序

鎌田君と正臣とは同し安政の卯のとしに生れて月日もへたゝらす名さへに一字は同しかりきされハにやうるはしき友とちとなりて明治

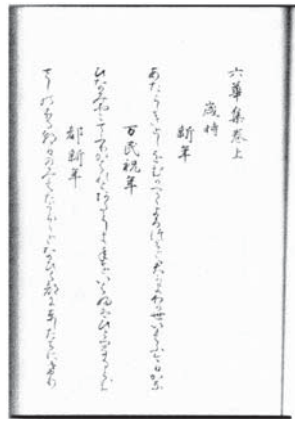
二十年より大正四年まで二十九年かほと机を並へて歌しぬひし袂をつらねてそゝるありきもし興到りて君画をかけは正臣これに歌をしるし宴に列りて正臣君に酒をすゝむれハ君菓を正臣に譲りなとせられしことまた昨日のやうにおほゆるを君なくてはや十年とハなりにけり忘れもやらず君かやまひのおこりしハ今上天皇御即位大典の後宮中にて能楽を天覧あり正臣も君と並ひて陪観席に侍らひしか家にかへりてやかてこゝちあしくなりにきとそ君は鹿兒島藩の国老の家に生れ父ぬしは王事に勤めし名高き人なり君か歌にたくミなりしは天稟にもあるへけれとまた刻苦練磨の然らしめしなり御哥所長たりし高崎正風翁も鎌田氏の哥ハ日を追ひて進歩すと歎賞せられしこと明治廿六七年のころにはいと屢なりき文字かくことも熟達せられて写本などハ速かに功を卒へられき多かくわさも拙からす村瀬玉田画伯に学はれしか画伯の詞に鎌田君の画ハ予か門に入られさりし前既にもものになれきといひきをしへ子を思ふこと厚かりしかは門に入るものもさはにて詠草を寄せまた社を結ひて歌巻のえらひを乞ふも多かりければ夜毎に更たくるまで懇にこれを引直し選ひもせられこの労をなくさめむとて酒をそあまたものせられけるあはれ慕はしき君よなつかしき友よと思ひあまる時にはかきおかれし画の帖や歌の短冊やとりいて、見るにもその数はつかなれハ遺稿などのすりまきとなりてあらましかハと思はれしに君かをしへ子のなかにことにすくられたる学匠にして歌よむこともかいなてならぬ北里蘭ぬしかこの二とせ三とせち、に心をくたきて君の歌ともを集めもし選ひもせられ下もえと名つけ旧師を思ふ心のたくひなくあつき北川ぬしとあひはかりて印刷せしめらるゝことゝなりしハいと悦はしくこそこれ世にいてなは君か教を受けし人々にはこよなきかたミとなりさらぬ哥人のためにもよきみちひきともてはやさるへしと慕ハしミなつかし

ミする正臣かこゝろを人のうへにもおし及ほしてつたなき筆をりつ
かけまくもかしこき日つきのみこ御慶事あらせられみめの宮と共
にいせの大ミ神拜ミに京をたゝせたまひし日みうたところにつか
ふる

坂 正臣

〔墨跡（浄書）部

26 『六華集』二冊



明治四年（一八七二）継職した真宗本願寺派本願寺二十一世大谷光尊（法名明如）は、明治三十六年（一九〇三）に遷化。この光尊薨去後七回忌辰（明治四十二年）に際して、実質的には大谷光瑞の妻籌子かすこの主導により光尊の家集が編まれた。『六華集』という。

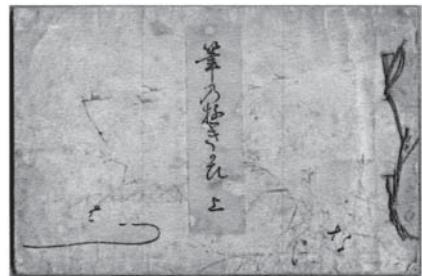
『六華集』には、光尊が村山松根（薩摩人、八田知紀門）の労により高崎正風に師事した縁により、「従二位勳一等藤原朝臣正風」名の「序」を備う。『六華集』は和装石版摺。この版下は阪正臣の浄書である。正臣と光尊そして籌子はかねて知り合いである。「全ナシ」。



図版②

昭和2年に木版3度手摺にて出版されたが、昭和7年には石版摺普及版も出されている。

27 『筆のゆきかひ』上・下二冊



明治三十六年（一九〇三）十一月、四十九歳の坂正臣が関根正直と共著した書式手本帖。上巻には手紙文手本三十六、下巻には日常書式三十を収める。赤坂区榎坂町五番地住の正臣が筆者となりて浄書したものを梅澤巳之助が刻した石版摺、タテ16cm×ヨコ24cmの和装横本。日本橋区の大倉保五郎すなわち大倉書店発行。表紙は所謂手習歌「難波津に咲くやこの花」歌による歌絵。「全ナシ」。

大倉書店は、幸野梅嶺『梅嶺花鳥画譜』や河鍋曉斎『曉斎画談』を出した本屋であるが、坂正臣は上記以外に『女子文の山口』（二冊）もあるか。

28 『新定女子習字帖』全四冊

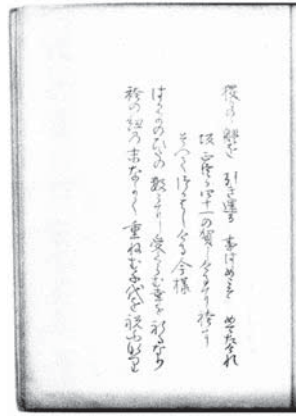


本書は大正二年（一九一三）にタテ23cm×ヨコ7.5cmの折本形態にて富山房から出版された。編輯者は富山房編輯部なれど習字手本筆者は阪正臣なり。ここでは巻四のみを掲ぐ。当該帖には乃木希典辞世歌等を収む。「全ナシ」。

29 『たつかね集』三冊

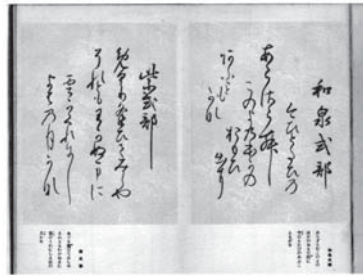
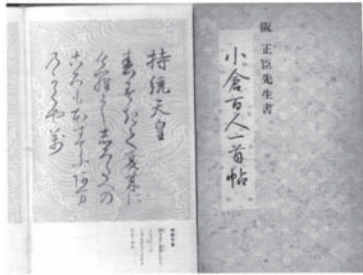
枢密顧問官兼御歌所長正二位勳一等男爵高崎正風が薨したのは明治四十五年（一九一三）二月のことである。彼は在世中より家

集上梓を目指し、阪正臣等の版下浄書も終えていたのであるが、御大葬と重なり止め置かれた。為に「高崎家蔵版」となった。これが正風主催の一徳会等の強い願いにより出版されたのは大正十五年（一九二六）十二月、御代がわりの直前であった。著作者は故高崎正風、発行者は一徳会（代表柴田寅三郎）、発行所は中央歌道会。和装石版摺。浄書は阪正臣。巻軸には



坂正臣か四十一の賀しけるに袴にそへてつかはしける今様
はかまのひたの 数々に 受くらむ
幸を 祈るなり 袴の紐の 末なか
く 重ねむ千代を 祝ふなり
と在りて、交わりの深さが覗われる。

30 『小倉百人一首帖』



本は、歿後に雑誌『婦人倶楽部』第十五巻第一号（昭和九年一月）に『小倉百人一首帖』なる名にて簡略化したタテ21cm×ヨコ12.5cm折帖の体裁を以って附録された。ここでは、この附録本を正

阪正臣が女学校習字手本も数多く書したこと
は知られている。彼の
この方面の代表作品
は、大日本雄弁会講談
社から出版された『小
倉百人一首色紙帖』で
あると謂われる。この

臣の筆跡の一部として紹介しておく。裏面は高塚竹堂『毛筆習字用婦人手紙辞典』なり。

おわりに

『椋屋全集』の拾遺補正作業は、阪正臣の全体像を把握する為には必要である。しかしどうしても為さなければならぬ作業ではない。故に、現情の『全集』の評価変更を求めるものではない。要は阪正臣の何を考えるのか、と言う点に於いて意味がある。

本稿が目指したものは、『椋屋全集』と名付けられ阪正臣の文学作品群を如何にして拾遺補正し「定本」に近付けるか、という命題である。そして、当該営みの中で、ここでは手許の通計三十点の資料につき阪正臣の歌二十九首と、彼の序文等を五点、加えて彼の墨跡五点、を紹介した。これ等は、執筆年紀が比較的得易いものに限定される。

ついでには、例えば次の如きも採択されるべきであろうことは十分に承知している。

- ・ 弥石門之助発行兼編輯『言葉の花』第六号（明治廿五年十二月文林閣）
- ・ 『近衛忠熙米寿記念歌集慶音集』（六条定光発行兼編集、明治廿九年四月）
- ・ 平沢渚園編輯兼発行『新題歌集』（明治四十一年十一月、中央歌文会）
- ・ 税所敦子『御垣の小草 上・下』（明治廿一年十二月）

事実、手許のものによる限りにおいて、これ等の本は阪正臣と関わる。しかし、これ等を加えても、おそらくは「全て」とはなるまい。ここではその有効性が確認されれば良い。
彼の序文は、例えその本が活版であつても大半石版摺りで編された。その事自体、彼が能書であつたことを証明しよう。ここで扱った以外にも序文の依頼は数多くあつたと思量される所以である。

もちろん、ここに扱った資料が正臣の全部ではないし、全体像が把握出来た訳ではない。色紙・条幅・短尺の類には全くふれてはいない。例えば『全集』七三四頁に

大野なる萩原宗維が新年のかけものにすべく、萬歳の二字を大書し、歌かきそへてよといひおこせけるに、

としのたつ朝にきけばかまのゆも松ふくかぜもよろづ世のこゑ

とあるが、所蔵者の移動等を考えるならば、これを確認することは並大抵ではない。これを確認しなくとも『全集』が全てではない事は知られ得る。しかしこの事によって『全集』そのものが否定される事はない。『全集』は物指しとして、その役割を充分に果たしているからである。

(本学非常勤講師)